

岩野泡鳴 著

新 刊
耽

溺

定價 八拾五錢
郵稅 八錢



四十餘日

水野 仙子

一

炬燵にうつ伏したまゝになつて居て、ふと氣がついてみると、高窓が青白いほど日がのぼつて居た。吃驚して飛び起きてお芳はそこらを見廻した。子供の聲やら荷馬車の轍の音やら、表通りはもうがや／＼して居るらしいのに、店の者もまだ前後不覺に寢入つて居る。清治といふ小僧の名を二聲ばかり呼んで、お芳はく／＼になつて帶を解いてきりつと着物の前を合した。二人の醫者は馬乗提灯が相前後して山サの潜りを出て、曉近い街に南と北と分れてから、一時間程して皆やうやう寢床に入つたのだ。何かと後の始末をして居た産婆が、襷をはづして一先づ暇を告げた時には、母親もお芳も少からず心細く思はれた

が、二晩一日看護に疲れた人を、さういつまでも引きとめて置く譯にはいかないので、一寝入りして夜が明けたら、また見舞つてくれるやうにとくれぐれも頼んだ。心許なさうに座敷をのぞいてはうろろ寝もやらずに居るお芳を、母親は一寝入りするやうにと進めて自分も掻巻を着て娘の枕許を衛つた。二三時間前の恐ろしい騒ぎを思ひ出すと、呻吟聲がまだ耳について居るやうな氣がする。臺所に來て見ると、昨宵夜食に出した玉子の殻が皿の上にそのまゝになつて居た、お茶の代りにと店の棚から持つて來て口を切つた正宗の壘が、底の方に黄色い色を残してそれも隅の方に押しやられてある。お芳は一人で厨のことをしなければならなかつた。

赤兒が無いと肥立が悪い、それに並はづれて骨を折つたのだものと、母親はひどく産後を氣づかつた。それも無理はなかつた、一年ばかり置いて前に一度同じやうな産の苦しみをして、二月ばかり床をはなれることが出来なかつたのだ。

清治が向ひに行つて千藏といふ出入りの越後者の爺が來た。産婦の眠つてゐる間にそつて白木の小さな箱を縁に出して、繩をかけて爺はそれを背負つた。母親は其上に赤い裏のついた着物をつけた。見えないうやうにと爺は其上に蓑を着て、羽織をひつかけた宗三郎は、一把の赤い線香を袂に入れて先に立つた。

午後になつて産婆が來て、するべき手當てをしてから驗溫器をかけた。

「どうでせう、熱が大へんあるやうでせうか」と煙管をついて母親が膝を進ませると、

「さうですわ、少し高いのが當り前ですけれど……三十八度五分ばかりありますよ」と産婆は首をかしげた。

翌くる日になつて産婦はお乳が張るやうだと言ひ出した。母親は元來が小さい乳首を指先で採み出すやうにしなから、自分から子供のやうに吸つてやつてそれを茶碗に吐き出した。はじめは薄い／＼水のやうだつたのが、暇ある毎にさうしてやつて居るうちに、だん／＼と白く濃いのが出て來るやうになつた。それを便所に捨てるのは勿體ないといつて、水を割つては臺所の流しに流した。

洋燈がついてから、あまり赤い顔をしてるやうだからと、母親はお芳と一緒に、有つた筈の驗溫器を箆筒の引き出しや火鉢の引き出しの中を探した。

お芳が火鉢の前に坐つて編物の針を動かして居ると、

「芳、幾度だよ」と座敷から出て來て目の前に驗溫器をさし出した。水銀の細い臍り目を灯影に翳して吃驚したやうに、

「三十九度二分!」とお芳は言つた。

「三十九度二分?」と母親は鸚鵡返す。

「三十九度二分?」と炬燵に居た老人が聴くも耳をたつた。

「一重々々と絹を張つて行くやうに、二年ばかり前に全く明を失した老父は、若い頃に醫書をあさつて少しは其道に通じて居た。病氣のことに就ては、毛程のことにも心配して騒ぐ方だつた。」

帳場に出て居て宗三郎と呼ばれた。三人が火鉢を圍んでひそ／＼醫者の人選をやつて居ると、「おつ母さん、おつ母さん」と屏風の影から産婦が低い聲を出して母を呼んだ。

二

瀬戸といふ薄曇りの眼鏡をかけた醫者は車がとまるやうになつた。

産婆は看護婦から仕あげた産婆だつたので、毎日洗滌のために通つて來ては、熱度表に鉛筆を入れて其高く低くなるのに面を曇らした。

宵のうちに一寢入りすることにした母親に代つてお芳が枕許に雑誌を見て居ると、突然眠つて居たと思つて産婦が、抑揚のない調子で何事か言ひ出した。

「え？」と手をさし込んで居た行火の上にそれを伏せて顔を覗くと、其顔を見かへしてまた同じやうなことを言つた。眼は人を見て居るけれども何處やらうつとりして居る。お芳はぎよつとして母を呼びに立つた。

「勝、お勝、苦しいか？」とそつと額に手をやつて見た母親は、

「道理で夕方あんまり紅い顔をしてると思つた！」とつぶやいた。

宗三郎も吃驚したやうに這入つて來て直ぐに清治を醫者の家にやつた。熱度をはかつて見ると四十一度にもよつぱり頭が出て居る。來るべき暴風が來たといふやうな氣を集めて人々は枕許につくねんとし

た。書間だけ病室廻りを履ひ車でするらしく、醫者は馬乗提灯をさげて和服で來た。寢の中を蛇の目の後について清治は手さげをさげて續いた。型の通りに脈をとつて再び熱度をとつたが、其時はもう一度ばかり退いて、かへつて熱さうにふら／＼と頤にかぶさる蒲團を氣にして居た。醫者が歸つたあと清治はまた頓服を貰ひにやられた。

聞き傳へて折々種々な見舞ひの客が來た。此家の老人のものの堅いのを少からず信用して居る蒟蒻粉問屋の新造、夫婦揃つて塵も積つて山主義の身代を溜めた加納屋のをばさんは、殊に度々見舞つてくれて其度にお芳にいろ／＼なことを教へて行つた。産婆や何かに、手のないところを一つお茶を出したり何かしなくとも、後で相當のお禮をすればいゝものだとか、一寸した漬けものゝ仕方なぞをしへてくれた。

また新吉田のお竹をばさんといつて、縁續きになつて居る乾物やの女を、これは山サの一家が揃つて皆嫌ひだつた。榮える家を妬くやうに話し、衰へる家を小氣味よさうに語るやうな種類の女で、年中人の家の缺點ばかり探して居る。口のはたに唾を溜めるのが嫌ひだといつて、産婦はいつも此人の聲を聞く度に、眠つたふりをして病室にはいつて來るのを避けた。

老人の話し合手でもあり、お勝が若い頃に茶の湯を習つた先生でもあり、子供の時から不具の爲めに、占ひや灸點のやうなことをやつて居る人の細君も來た。人の好いばかりで、何處か足らぬといふやうな噂のある人で、其時來合して醫者と産婆が、白い衣を着てブラシユで手を洗つて、洗滌の用意をし

てもまだ病室を出なかつたのには少からず困つた。

一寸顔を出して見舞ひをのべて行く人もあり、兩隣りや向ひの家からも内儀さん達が来て、「赤んぼは仕方がありやせんけどもねえ、なにしろ親のからだが大切ですわい。なアにまだお若いんだから」と皆同じやうな言を云つて歸つた。出入りの商家からなぞも見舞の品を送つて来た。玉子が殊に多く集まつた。

四十度近くの熱が續くばかりでなく、時には平温をすつと下つて熱度表の青いすちが度はづれて高低になつた。そろ／＼薄曇りの眼鏡をかけた醫者の手にかけて置くのがなんとなく不安になつて来た。産科醫でなく、かうなつてはもう普通の病氣のやうなものだからといふ説も出て、つひ一週間ばかり前に開業した醫學士——新しいものを好む人の常の故か、町ではこの人の評判がすばらしかつた。其醫學士をといふことになつて、一寸手づるがあるのを幸ひ、加納屋のをぢさんが或る晩提灯をつけて、特にわざ／＼勝手元から頼みに行つてくれた。

其晩病人は突然烈しい戰慄が来た。早急のことゝて母親もお芳も少からず狼狽して聲をたて、宗三郎を呼んだ。醫者へ馳けさせた鐵雄といふのが、折悪しく近在の急病人のところへ行つて留守だつたと戻つて来た時には、戰慄は納まつて居たが、その代り今度は急に熱がり出して蒲團を掻いやつて仕方がなかつた。その明日背の圖抜けて高い醫學士が廻つて来た時にも、前夜と同じやうな戰慄が来て寒い寒いと大騒ぎをするので、其處にあつたありたけの座蒲團をかけて、母とお芳が左右から力を入れて押へ

て肩を押しつけて熱い／＼言ひ出すのも其まゝにして置いて、學士は宗三郎からこれまでの経過を靜

に聞いてやがて徐ろに脈の手をとつた。

薄曇りの眼鏡をかけた醫者は其日から病人かこつて止してしまつて、今までの藥代とそれにお禮としてビールを半打添へて持つて行つた

三

冬至に入つてからはめつきり寒くなつて雪の日が續いた。

○日 二十五度

つめたい／＼朝、寒い／＼日。

神の鉢の飯が凍つた。

お芳の日記にはこんな字が多くなつた。

水桶の水を力まかせに叩いて柄杓の柄を折る。

こんな朝もあつた。凍つた土にさらりとまた白く撒かれて。倉の前に鳩の足跡が紅葉形について居る。井戸石にかゝつた水が其まゝに凍つて居て、乗せた手桶の底がづるとなる、釣瓶の繩は冷たいといふよりは寧ろ痛かつた。

家の上と下と、この節では大抵お芳の手になつた、かうして切り廻すことが自分に出来やうとも

思はなかつたし、そんな時節が来やうなぞとも思ひもうけなかつた、姉や母に手傳つて朝晩の用位はして居たけれども、町家の娘並にお針に通ふ、朝はい、位にして出かけ、日によつては日が暮れてから歸つて来る、習慣になつて爲るべき用はして居ても、氣は少しもそんなことに散らなかつた。すべてのことに考へなしに生きて来た。

前髪の毛をまだ散切りにした居た時分、小さい姉が縫物の下にしのばせて居た弦齋の血の涙や小猫などいふやうなものを、ふとひらき見たのが病み付きとなつて、歌であれ詩であれ小説であれ、字の上には眼を皿にする興味を持つた、十七ではじめて體の變化を見るまで、お芳は男と女がどう違ふものかといふことも知らなかつた、烈しい驚きに泣いて初めて其時母から女といふものゝことを聞いた、驚きと不思議と、それも長くは續かなかつた。

「芳ちゃんはお出度十九になりやした」と今年の正月に友達弟子と師匠の家へ行つて、常から奇抜なことをいふのが癖で、かう年始の挨拶をして皆を笑はせたが、其時さう言ひながらいかにしても自分が十九になつたとは信ずることが出来なかつた。十九といふ年が不思議な可笑しなものに耳に響いた。

「お早やうござりやす」とか「鬱陶しいお天氣ですなえ」とか、そんな言葉をかけられても、たゞ「ええ」とか「は」ですまして居る。人への挨拶も出来ない母親からよく叱られたが、子供だ。子供だといはれるのがお芳には寧ろ得意な位なつた。

母親は大抵枕許に居る、口数の多い見舞ひの女客なぞを引き受けて、お芳は今までのやうにのつそり

して居られなくなつた。自爲と年上の人に對する言葉を遣つても恥かしくはなくなるし、合點も打てる。自分が長火鉢の横に坐つて、煙草やお茶などを汲んで出す時には、女——嫁——一家の主婦などいふやうなことが考へられるやうになつた。

店に來た取り引きの客へ茶を運ぶ、醫者を乗せて來た車夫に火を焚いてやる、それお手水の湯、それお茶、佛壇の南天の葉に埃が溜つたのも目につくし、通りかゝりに覆つて居る下駄を起す程の氣も出た。やらなければならぬと思へば家の中のいろ／＼なことに氣が付いた。

手が廻りかねて日が昏れてから、ぼつりぼつりと綿のやうに飛んで來ては着物にしみて消えるうすら雪に、手拭ひをかぶつて凍つた井桁に桶をのせて米も漸いた、其井戸車の軌る音を寢床に聞いて「芳はまア……」と病人の聲が慄へた。

早くどうか快くなりた！ 妊つても／＼辛い苦しい思ひの形見ばかり残つて、二十九の今だに一人の子もない心細だ、神を怨んでも見たが、今はもうそれは思ふまい！ 盲目の父、かうして横はつてくづく見れば、今初めて其白髪に驚かれる母、二人の妹それらが、重く／＼自分の肩に頼りかゝつて居た。何事も／＼自分を相談對手にして居た夫は、さぞ年暮の忙しさに手廻り兼ねて居るであらう、店の者達の仕着せもまだ整へてなかつた。先刻藥壘を持つてはいつて來た清治の足袋から、親指の先が赤く覗いて居た……あゝ、あゝ糞！ 生きなければならぬ！ 廣くもない家のことゝて、荷を下す車力の聲や、客の掛け引き、裏の倉に品を出しに驅けて行く足音

や、それらが鋭くなつた頭に手に取るやうに響いた、見えまい／＼と思つて居た手袋の片々が、鼠に喰はれてぼろ／＼になつて棚のかげから出て來たり、荷車が隣りの小間物やの店にかけて、轆が壊れて突き出されてあつたり、いろ／＼なことが病人の目に見えた。

四

「お芳、御苦勞でもなア、稻荷様へお母さんの名代になつて參詣して來てくれろや、姉さんの命をひに……若しも快くなつたら旗を奉納ますつて願をかけて……」
老人の頑愚を嗤ふにはお芳は猶幼なかつた。馬鹿々々しい、そんな氣も起り乍ら猶また漠然として神といふものに望みをかけて、一寸着物を替へて家を出た、宵に小降り雪が解けかけて、家々の檐に飛沫がして居る、泥に塗れた雪が下駄の齒にきしんで足袋が濡れた。
「おつ母さんはとても助かるまい／＼とひとりで青くなつて居る。併し人間といふものがさうも容易く死ぬるものだらうか？ 姉さんが死ぬ？ あの姉さんが死ぬ？
人が死んだといふことを聞いてもさう不思議には感じないが、さて其死といふものが今自分の家に来やうとは如何しても思ふことが出来ない。死ぬもんか、姉さんが、あの姉さんが死ぬもんか！
併し若し死んだとする……山崎家に大切な姉さんが死んだとする……かう思つて其時のこと、それから以後のことを想像してお芳は愕然とした。

宗三郎兄さんは婿に來た人である。親身の娘といふ鎖が切れて、舅姑と婿の間には間隙が出來すには居らぬ、新しい嫁、それを外から持つて來て押つけたとて、益々其間隙が大きくなつて行くのに決定して居るのだ、世間によくある奴。若しも私も私でも押し付けられたならば……
厭だ厭だ、身慄ひする程いやだ！ 其時には、其時こそ私こそ死んでしまふ、いや／＼死ぬにも當らない。其時こそ憧憬れて居る東京に出来る機會なのかも知れない……

お芳は書くことを知つてそれを雑誌などに投書することを覺え、高じては常に其道に憧憬れて居た。女といふ名に縛られて所詮許されさうもない望み、ほんとに神様といふものがあるならば、私を殺して姉さんを助けて下さい。

感情に喰はれてお芳は悄然となつた。さていつの間にか鳥居を潜つて居たけれども、眞面目に合掌して母の願ひを届ける氣にもなれなかつた。

五

醫學士のここから看護婦が毎日通つて來て洗濯をした、その人はよく學士の細君の蔭口なぞを産婆に話して居たが、或る日も縁側のところで二人が何か話して居る。

「ねえ澤田さん、あの石井のお澄さんね、あの人そらあの人よ、あの人また入院よ」
「へえ——また？」

「月經閉止三個月だつて……」

何氣なくお芳は出て行つて眞つ赤になつた。お芳はこんな職業の人達ですら、そんなことを言ひ合ふなぞとは思つても居なかつた。

加納屋のをばさんが下女を一人手傳へによこさうかと言つたのを、「い、え、結句一人で氣長にやつた方がいゝから」と斷つて、宗三郎の肌の着替までも洗濯した、雪解け道に足袋を汚して來ては、脱ぎ捨て、かけ替へがなければなのでそのまゝ赤い足をして居るので、母は見兼ねて小言を言ひながらも、氷柱の碎ける檐によくそれを洗濯した、小學校から、或はお針から歸つて見ると、母親は丸い脊中をして火鉢の前にそれを刺して居る、そのうちの成るだけ白い、成るだけ刺し目の少いのを選つて糸を切つて履いた——こんなことを考へながら、男のものまで洗つたり着せたり、それが女の運命なのか——と思つた。

風呂場はあつても此節は大抵好きな時に銭湯に行くことにして居る。耳を切るやうな外の寒さを思ふとつい億劫になつて、三四日行かずに居たからと、お芳は夜のことゝてむきみやさんを着たまゝ手拭ひを持つて表に出た、湯屋のある横町へ曲らうとしたところで、提灯を持つた小學校の同級生に會つた。

「なアにまあ芳ちゃんはんそんなものを着て、と其友達は笑つた。

「だつて働くのにはこれでなくちやア……」

「働くだつて芳ちゃんが……」

「そんなこといふなら見なんしよ、これでも随分稼ぐんだからない」とお芳はつと目の前に握つた手を出した。手の甲はがさ／＼と荒れて戦が一ぱいに切れて居た。

「まア……」と其友達は顔を見て、活潑で無邪氣で文章が上手で、先生達に可愛がられて居たその人が……といふやうな顔をした。

また清治といふ子は面白い子だつたので、毎日薬取りに行く薬局の書生と仲善しになつて、時々遊び過ぎて遅くなつて來て宗三郎に叱られたり、さうかと思ふと戦や霜焼けの薬などを貰つて來てお芳にくれた。

「お芳ちゃんお芳ちゃん、君島さんがこれよこしたぞい」と或る日清治は薬櫃と一緒に一通の手紙を渡した。

「君島さん……」

「ん？ 薬局の人、書生と口早に言つて行つた。

披いて見て笑つてお芳は捨てた。歌の眞似したやうなものが二三首書いてあつて、例によつてお芳の文才を稱へてある。此種の思はせぶりな手紙は絶えず地方からも來た。

お芳の足の霜焼けは顔れて痛みに變つた。

「一人ではなか／＼大へんだから民でも呼びよせて使つたらどうだい」と宗三郎の姉が來てよくさう言つた。

「ほんとにまあ芳ちゃんをよく働くことと……」加納やのをばさんが来る度に感心する。この人には二番目の息子があつてもう嫁を取る時分になつて居る

六

蜜柑、数の子、綿、氷豆腐、細い札のついた砂糖の袋や、尻尾を水引で結んだ鹽鮭などが、年暮の贈物としてやりとりされるやうになつた。

病人は先達てから左腹部に出来た癰りがまだとれなくて、熱もあまり高くはなくなつたが同じやうな度で續いた。學士は試に其處に蛭をつけて見たいといふので、お芳は或日町の裏の百姓家に蛭を買ひに行つた。

畑と畑の窪みや、細い蔓の枯れて絡まつた樹の株などに、斑と残つた雪が少くなかつた。鼻色の夕暮の光りに風はやはり頬に冷たく、寂しい郊外を一二軒づゝ低い藁家が點々して居る。

「いくら高く出したつて獲れぬものあ仕方がねえ、冬はみんな豆つ粒のやうにまるまつてゝなかゝ見付かるもんでねえだ、一疋一兩出すつたつて、なア獲れぬものは仕方がねえや」と動かなかつた。

×市の取引先に依頼して、其處から小包で届けて貰つたが、其時には幸ひ用がなくなつて、饅頭の中にたい黒い蟲が延びたり縮んだりした。

「まあ上つて、よ、よう」とお芳は友珍らしさに一寸お針の歸りから届けるもの旁々顔を出した友達を無理に引きあげた。

「此頃は誰と誰行つてるの？ お高ちゃんは？」

「お高ちゃんはこの頃休んでるの、みんな年暮で忙しいもんだから……私も今日つきり、お秀さんは風邪ひいたつて此頃ちつとも來なかつたわ」

「さう」お芳はみんながうつむいたりひたり、時には顔を見合して大笑ひしたりする人達の丸く座をとつた有様を、暫くやすんで見れば懐しいと思はれるのであつた。

「姉さんどうしたい、少しはいゝの？」

「少しはいゝやうなだけれどまだやつぱりない、熱が下らなくつて……」

「忙しがつぱい、一人だもの……まあこんなにめなしが切れて……」と火鉢に翳したお芳の手を握つて眉を顰めた。

「がさ／＼して自分の手のやうでないの……一寸ほら！」とお芳は袖口から赤い襦袢の袖口の切れたのを引っぱり出して笑つた。

「お師匠様がよろしくつて、お見舞ひにあがらなくちやならないんだげつと今少し仕事を支へてるからつて、あのない、そらあの伊勢屋の結納もの……そりやあ立派なの、仕度てたら帯が一番映えたわ、出来上つたら行つて見なんしょ、黒の方さへ出来上ればそれで揃ふんだから……」

「伊勢屋の御祝儀はいつ？」

「二月の朔日だつて」

「あのぼんちやん、いよ／＼お婿さんになるのかなア」お芳も友達も、そのぼんちやんといふ綽名を言つて笑ひこけた。

「何縫つてゐるの？」とお芳は歸らうとする友達の風呂敷の端をめぐつた。

「まアいゝ柄、誰の、貴女の？」

友達は嬉しさうに笑つてぼつくりと首を下げた。

「もうお正月、併し今年も歌留多も取れない」お芳は寂しさうに笑つて送り出した。

其晩お芳は、東京の醫學校へ行つて居る中の姉のところへと思つて小包を纏めた。先達て小紋の着物に欲しいと言つて來たので、安物の絹に形を置かせたのが今日出來上つて來たのだ。

あり合せた羊羹や水餅のやうなものも詰めやうとしたので、荷の形がどうしてもうまく行かなかつた。少しく焦慮れて來たところへ、母親が一寸口を出したのが氣に觸つて、お芳は

「えゝつ」と赤い顔をしてそれを目茶々々にした。

「おゝ／＼親にたてつけ、わがまゝな！何がそんなに氣に入らないのか知れないが、君は君で此方の騒ぎを知らずに待つてゐるからと思つて早く送れと言つたまでなのに……病氣だと知らしたら試験前だといふのに心配するからと思つて……」

「いつてば！お芳は身を揉んだ。

淺猿しいとは思ひ乍ら、自分一人が何事も思ふまゝにならぬやうな僻がして、忌々しいやうな、人が羨しいやうな、焦燥れて／＼さうしてすねて見たかつた。

暫くすると病人が屏風のかげから、

「芳、芳……」と細い聲を出して呼ぶので、お芳は急にもの悲しくなつて、齒を喰ひしばつて顔を蔽ふてしまつた。

七

餅は宗三郎の姉の家でついて貰つてともかくも飾りをした。

病人も年を越す頃からそろ／＼見直して、一日平溫位にとゞまつて居る時もあるやうになつた。併し衰弱の爲めに元氣はもとよりなくなつて、かげの部屋に客の長い話や、戸の開け閉てなどに一々眉を顰めた。戸のある柱には紙を張りつけ、そゝつかしい清治は必ず一日に二三度位は足音や戸の開け閉て、小言を喰つた。

友達のところから度々お芳に歌留多の使が來た。お芳は一々紙片に斷りの文言を書いてやつた。母親も病人も氣の毒がつてゐる容子だつたが、お芳はその代りに欲しいと思つて居た一葉全集やその頃評判だつた其面影のやうなものを買つて貰つた。

或る晩新年の雑誌を買ひに出掛けて、ふと通りがりの友達の家に寄る氣になつた。

「まあ芳ちゃん」と其家のをばさんが迎へて友達を呼んでくれた。恰度歌留多をとるといつて四五人の人が明るい座敷に集つて居た。つひ交つて見る氣になつた。

「今晚は」と其室へはいつて行つた。一樣に向いた人々の顔を集めて、お芳はふと平常着のまゝだつたのに氣が着いた。

「珍客來、々々々」と一人の中學生が言つた。

疲れ切つた身體には蒲團が重いといふので、天井から麻糸を下げて蒲團を吊つた。そうして一時間と同じ向きになつて居ては體が痛いといふ。神經痛を起して足を持つと飛び立つやうに騒ぐので、腰のころの隙にそつて手を入れて靜かに寢返りをさせてやる。床擦れがしないやうにと綿を置いてやつた。十時十一時頃まではお芳が番で、それから母親か宗三郎が代ることに決つて居た。行火に小蒲團をかけて、湯氣のたつ火鉢の傍で、枕時計の音を聞きながらお芳に雑誌を讀んだり、病人に「我輩は猫である」などを讀んでやつた。

時には都や地方の友達などに手紙を書いた。都へ都へと誘ふまで見ぬ友達も多くあつた。それらの返しにはいつも老いたる父母、家の事情といふことが書き込まれた。何處まで自己を没しなければならぬか？と反問して來たのに對して、凍る筆を火に翳しながら覺束ない議論みたいなものを書いた。

男が女に送る手紙には、いつかははたと首をかしげるやうな箇所が必ずあつた。消した跡の字を透して讀んで、お芳は我知らず微笑む時があつた。

一日看護婦が來て小半時待つて居ても、一緒にやる筈の産婆の澤田さんがなか／＼見えなかつた。清治が折悪しく使ひに出て居たので、お芳は沖といふ其産婆の居る家へ迎へに行つた。其處もお針の弟子を澤山にあづかつて居る家で、板塀の中から歌留多の聲と賑やかに笑ひ聲が洩れた。澤田さんは黎明から産氣の付いた家から迎へに來られて、今だに歸つて來ないといふ。引きかへさうとすると障子をがりとあけて、「芳ちゃん」と女の人が笑顔を出した。

「あら！」

それは中の姉の友達で、お芳が小さい時に可愛がつて貰つた人だつた。歌留多に招かれて來たものと見える。

「姉さんが悪いんだつて？どうなの此頃は」

「えゝ少うし快くなつたやうなの……」

「さうお大切に……」

其人は財産家の娘だからばつとした身なりをして居た。

夕方になつて澤田さんが裏口から忙しさうにはいつて來た。

「どうも今日は失禮しました。岡野さんのお嫁さんがお産に出ましてね、えゝまあ初めてとしては輕る

い方でせうねえ、けさ方の二時々分から痛み出したんださうですよ。大旦那さんがまあ大騒ぎをしてそれはく、え、女のお子さんでしたよ」

強いられたといつてほんのりとした頬を、熱い／＼と言つて兩手で叩いて居た。

八

「宗三郎は眞實の氣の付かない男だから……あれほどの大病人の傍で、氣が付きさうなもんだのに、なんだつて青銅の火鉢へかちん／＼と煙管を叩きつけるんだもの、傍に居て私アはら／＼して居る」母親はある時老人と火鉢のところに顔を集めてこんな話をして居た。

「む／＼さうともな、少しは氣を付けなくちやア……好い人間は好い人間なだけつと少うしたわいのない方だから困る」と老人は火なたのついた腕を火鉢の縁にならべて合槌を打つた。

「さうともい、すべて何事にも氣が付かない方だから」

此時宗三郎が店から忙しさうにといつて來てちらと目をやつた。

「用がすんだらお茶でも飲ましてやれ」と母親はかう言つて思ひ出したやうに長煙管をとりあげた。

「は」宗三郎はまた店へ出て行つた。

「今度は是非君にも免狀をとらせたいものだ。宗三郎にだつてさう／＼はいくらなんでも氣の毒だか

お茶からふとこんな話になつて二人がひそ／＼して居ると、其時また二階から降りて來た宗三郎が、ふつと不快な顔をして店に出て行つた。

別段何事もなく二三日経つたが、宗三郎は或日出掛けから豚の肉を竹の皮に包んで懷の中に入れて來た。お芳は七輪を夕餉の席に運んで鍋をかける。脂肪の煮えたつにはひが久しぶりで家の中に漂つて、白い蒸氣が洋燈の傍をかすめて騰つた。

「お父さん豚が煮えやしたから」と宗三郎は手づから皿に肉を盛つて老人にすゝめた。

「豚え？ 今日喰へまい」
お芳がはつと思ふ間に、二三日腹を痛めて居た老人は何氣なくかう言つた。

「さうですか」

お芳はそつと宗三郎の顔を偷み見た。

盲目の老人には勿論、母親にも氣の付かないことだが、お芳はいろ／＼なことに氣を配つて一人ではらはらして居た。

かりそめの咳一つでも、相方の索り合ふやうな心には大きな態度となつて見えた。宗三郎の顔色も母親には何でもなく解釋させるやうにと苦心して、老人夫婦が小聲に話して居る時には、お芳は必と餘外ごとの口を入れた。魚の煮付一切れでも、都合の悪い時にはいゝ方を宗三郎の膳にのせた。

朝から宗三郎が家をあげた日がある。大抵枕許で行く先を斷つて行くのが、其日に限つて何とも言い置いてなかつた。

「なアおせん、宗三郎は嬬の病氣が厭になつたのであるまいな」

一日炬燵に蹲つて居る老父は、夜になつても宗三郎の聲が聞こえぬので、心配の願をあげて通りがゝりの足音を止めた。微聲だつた。

「まさか……まさかさうでもありやすまいが……」

母親もそれは信じなかつた。宗三郎は程過ぎて何氣なく歸つて來た。出先から姉の家へ廻つて其家で夕餉をすまして來たといふ。顔色も別段赤くなかつたので人々は安心した。

珍らしく宗三郎は正宗の口を切つて膳の上に乗せた。其日は一日もの言はなかつた。鐵の火鉢を傍に引きよせて、盃のひまにはばかりぐと煙を吐いた。煙管を叩きつける音が烈しくしかも絶え間なかつた。常から下戸のことゝ直ぐにもう眞つ赤になつて、いつもにないことなので怪訝な顔をして居る清治を烈しく叱りつけた。御飯を喰べずにいゝと出て近所の新吉田へ行つた。清治を後からそつとやつて見ると、旦那の峯さんと酒を飲んで居るといふ。

産婦にも様子がわかつたと見えて、

「一體どうしたの、お母さん何かしたんでないかい」と氣を揉んで聞き出した。

「何がなんだかさつぱりお母さんには譯がわからない、何言つたんでもなんでもなし、一人であゝして怒つてゐるんだもの」

其處へお芳がはいつて行つて、

「だから言はないこちやない、お母さんは、またいろ／＼なことをいんだもの……」

不平はどうしても親身の者にむかつた。

「お母さんが何を言つたい？」と母親は目を睨る。

「今日は言はなくなつて、此間からお父さんとひそ／＼話しながらばつかりしてゐるんだもの」

「それだつて何も宗三郎の悪口を言つた譯ぢやあるまいし……」

「だつて／＼それが悪いわ！唯だつて變ちきりんに思ふわ、さうして宗三郎兄さんがはいつて來るとびつたりと止めてしまふんだもの、何とか思ふに違ひないわ、そりやあ誰だつて……」

お芳は涙をこぼして母に喰つてかゝつた。小さな胸の心配ひや何やらで、つい興奮して言葉が烈しくなる。縛れ／＼て感情が弾き合つた。

「よし／＼、お／＼／＼そんなもみんなお母さんが悪いんだ、さうしてみんなしてお母さんを窘める、悪者の意地悪はお母さんばかりなんだから……どうせ……どうせ……勝の體の代りに神様が連れてつくれる。一生活の爲めに心配して死ねばいゝんだ……」

母親も泣いた。あべこべにかう怨まれて見ては、お芳は堪らなくなつてわつとして慌て、顔に袖をあて

た。

「どうしつべなア、私の病氣の爲めにみんなが……」

ほろ／＼と病人の顔から涙が落ちた。

「勝、勝は何にも心配することはないぞ、なアになんでもないことなんだから……體に障るから」と母親はまたおろ／＼した。

宗三郎は十時頃になつて眞つ赤な顔をして歸つて來た。

「御飯は……餅でも焼くかい」と言つたお芳の腫れた目を見て、

「いゝや喰べなくてもいゝ」と義妹には優しく言つて、其まゝ炬燵にござりと仰向けになつた。

九

日に／＼病人の快くなり目がついた、それにしても體はまだ少しも自由にならなかつたので、絶えず寝がへりをさせて貰ふのに人手が要つた。

病人から涙をこぼされたので、宗三郎もあれから氣を取り直して朝晩の挨拶も自分からするやうになつた。

看護婦や澤田さんはまだ毎日通つて來て、洗濯を終へてから火鉢を圍んでよもやまの話をして行つた。養物をしておいたり、時によつてはお餅を焼いたり、何かしらお茶うけの絶えないやうにとお芳は

注意した。時々はお子さんと澤田さんが歸る時に蜜柑や干柿のやうなものを紙に捻つた。

枕許の小机に並べた葡萄酒や藥罐の肩に塵垢が溜つた。絶えず立て通しの屏風に、今見れば字の跡を散らして血の跟見たいなものが附着して居る、凝乎と見てお芳は恐ろしい／＼いつかの夜の有様を思つた。女といふものか思はれ、子といふものか思はれ、續いて種々な家庭といふものか思はれた。婿取りは外目にはいゝやうだけれども人一倍辛い、かう誰か言つたことを思ひ出されて、今までの姉の立場が抉り出したやうにはつきりとわかつたやうな氣がした。いづれは女、この自分までがそんな渦の中にはいるべき運命を持つてゐるのかと思つた。

都へ都へと誘ふ友達のことが思はれた。

「お母さん、すまないげつとまたかへして」とお勝は氣の毒さうに寢がへりを催促した。搔卷を着てたわいもなく居眠りをして居た母親は、ふと首をあげて、

「またか——ほんに面倒臭いなア今かへしてやつたばつかりだのに」と億劫さうに立ち上つた。

「お母さんはまあ！」あんなにまで心配して大騒ぎして居た人が！とお芳はなんとはなしに母親の顔が見られた。ふとしたことから「此間お母さんは飽きたんだ！」と病人が口をあましたのを、あまり勿體ないことをいふと思つたが……。

そゝけた白髪が穢く見える。眠を貪るやうにそ／＼と行火に伏した丸い背が、影一ぱいに壁にうつ

つた。

水を吸ひ切つた床の間の南天が、塵垢に塗れて勢ひなく掛軸に影を置いた。
お芳はつく／＼と頭を押へるやうな部屋へやの空氣を感じた。

「はあもうこれで安心あんしんしやした。貴女あなたなんだつて四十幾日つてものは、芳よしも私も帶おびを解きやせんでしたからねえ、代り番かははんこに炬燵こたつにひつくりかへつて……いや／＼一方ひとかたならぬ心配しんぱいをしやした」と加納かどやのをばさんに、ある日母親ひはおやが述懐じゆつわいめたことを言つてゐるのを聞いた。

お勝かつは此間このあひだ床あげをするやうになつたら、看護婦かんごふや澤田さへださんや友達ともだちをみんな呼んで、一日歌留多いちにかると取りをするやうにと言つたので、お芳よしは今いまからそれを樂たのしみにして居る。

(完)



戯曲 偶像

吉井 勇

人物

馬屋原照雄、侍醫の子、文科大學生
山口銀次郎、某劇場の舞臺監督
喫茶店の女主人
一人の喫茶店の女

場所

新橋停車場の近傍

時刻

十一月の一日、午後二時頃

喫茶店の一室。正面に廣き入口あり。濃綠色の幕を垂る。その幕の

